

江分利満家の崩壊

——高齡者文学人生論

山口瞳 (1926-95)

山口正介 『江分利満家の崩壊』 (2012)

山口正介 『ぼくの父はこうして死んだ』 (1996)

山口瞳 『江分利満氏の優雅な生活』 (1962)

監督：岡本喜八 『江分利満氏の優雅な生活』 (1963)

砂利の多い道を少年が駆けてゆく。日曜日の午後一時半を少し廻ったところである。

江分利満氏はサラリーマン文士として、多くのサラリーマンに親しまれた人物である。現実には二足のわらじというよりは文士の期間が長かったようだが、六十八歳で死ぬまで生涯現役を貫いたサラリーマンという印象を読者に与えている。

大正十五年生まれの戦中派で、「トリスを飲んでHAWAIIへ行こう！」という宣伝コピーの作者として知られており、将棋、麻雀、競馬、野球、絵画などの趣味はセミプロ級の腕前、何をやってもこの人にはかなわないと思わせる才人だ。

そんな読者にとって、『江分利満家の崩壊』というタイトルは衝撃的だ。江分利満家が崩壊するなら、平凡なサラリーマン家庭はみんな崩壊するおそれがある。他人事ではない。

「砂利の多い道を少年が駆けてゆく。午後一時を少し廻ったところである。思いつめたような顔で駆けてゆく。左掌の十円玉は汗でビッシヨリ濡れて匂っている」。

貸本屋で漫画を借りるために駆けてゆく少年が『江分利満氏の優雅な生活』（昭和三十七年）の冒頭に登場するが、この少年が平成十二年に『江分利満家の崩壊』を書くという運命を背負わされることになった。

少年の父が亡くなったのは一九九五年、阪神淡路大地震の年、母が亡くなったのは二〇一一年、



江分利満家の崩壊

——— 高齢者文学人生論

東日本大震災の年。父母を看取った少年はいつのまにか還暦をすぎ、天涯孤独の身。そんな年になるまで結婚しなかったのは、神経症の母を一人きりにしておけなかったからだ。

少年は父母の最後を看取り、その様子を書き残すために生れてきたようなものだが、実は江分利満氏も父母の鎮魂のために作家になったようなところがある。彼は家族というものにつくづく愛想を尽かしていた。ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を愛読して、家族関係が似ていると思った。そして、自分自身をアリョーシヤになぞらえて、生涯、結婚しないつもりでいたらしい。

しかし、結婚したために、清く生きることができなくなってしまった。母は、「あたしがパパを墮落させちゃったのよ」と言っていたという。すると、江分利家はカラマーゾフ家のように、ずっと以前に崩壊していたともいえる。

八月三十日は江分利満氏の命日。草臥忌とよばれているが、辞世の句はない。「私は句会に誘われることがあるが一度も応じたことがない。よくもまああんな人前で禪（ふんどし）をはずすようなことが出来るもんだ、と感心し、恐れ入ってしまふ」などと書いているが、『血族』と『家族』は禪をはずした和製ドストエフスキーの文学だと私は思う。俳句の作者は遠縁の菩提寺の住職。

死ぬるとはいなくなること冬座敷 たつを